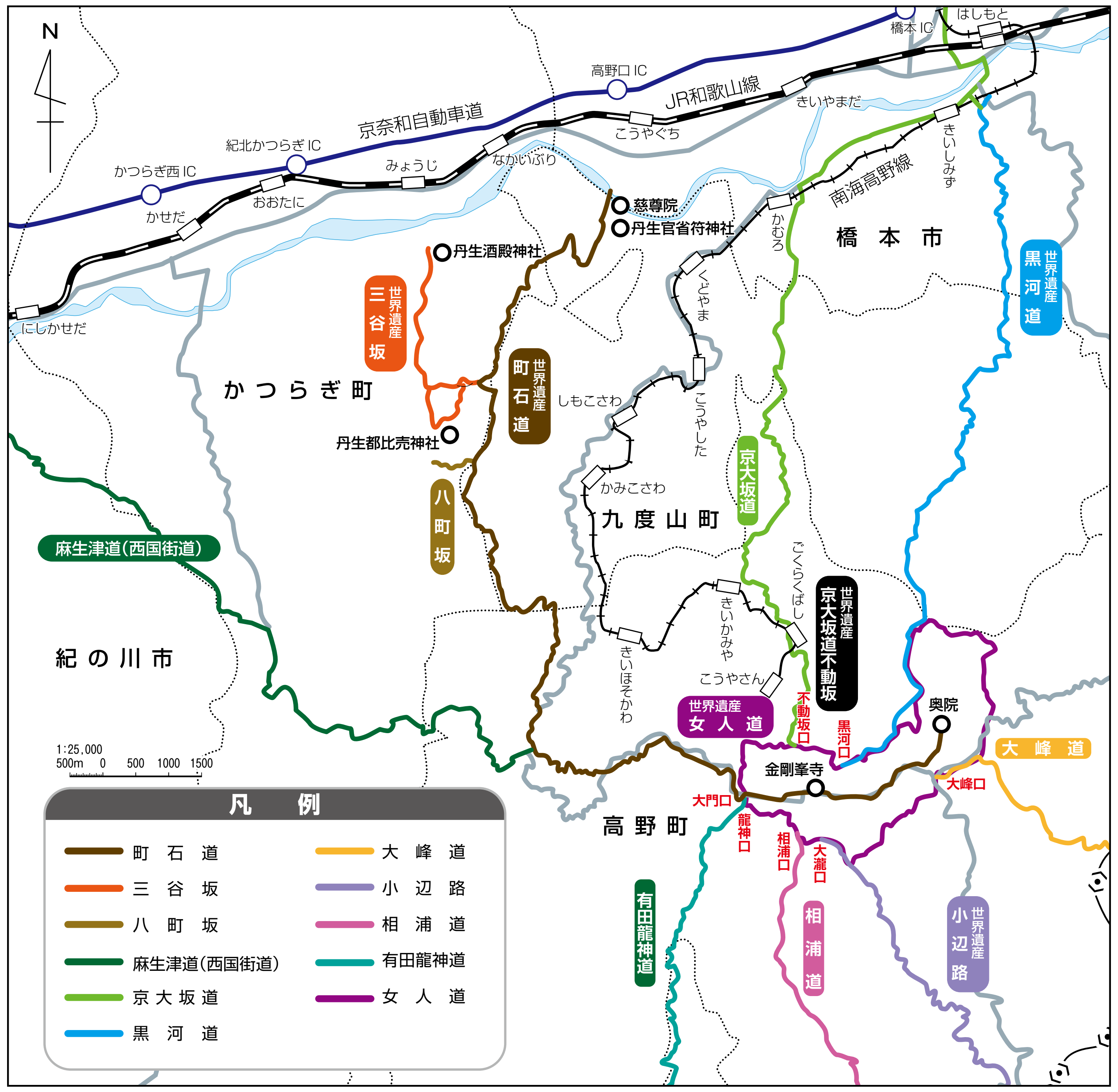
高野山への道



高野七口と女人道

高野山は八葉の峰と呼ばれる外周の山々に囲まれた山中の盆地状の地形となっており、高野参詣にはこれらの外周の山を越えて山内に入っていきました。山内へは各地から道が通じており、高野七口と呼ばれる入口が定まり、それぞれの口には女人堂が建立され女人禁制とされた高野山内への女性の入山を禁じていました。江戸時代後期に編纂された『紀伊国名所図会』には次の七口が挙げられ、やがてそれぞれの口に至る道を含んだ意味でも用いられるようになりました。

▼大門口

町石道をたどり高野山大門に至る道で、高野山の正面玄関にあたります。かつらぎ町の三谷からの三谷坂、紀の川市の麻生津からの麻生津道も町石道に合流して大門に至ります。高野山内への西方からの入口で、西口・矢立口・麻生津口・和歌山口とも呼ばれました。

▼不動坂口

高野山の北の入口で、山内の一心院谷に至り、京口とも呼ばれています。ここには女人堂が唯一残されています。京・大坂より紀伊見峠を越えてくるものと、大和路より待乳峠を越えてくるものが二軒茶屋で合流し、学文路からこの道を登る参詣客は十に八九にも及ぶと言われました。

▼黒河口

大和口とも呼ばれ、橋本よりの近道とされます。高野山への北東の入口で、粉撞峠から山内の千手院谷に至ります。

▼大峰口

高野山の東方からの入口に当り、東口・野川口とも呼ばれます。山内の蓮華谷に通じ、大峰山上から洞川、天川を経て天狗木峠からここに至ります。一度この道から高野山に登れば、その功徳は七度半に及ぶとされ、この道筋は七度半道とも呼ばれています。

▼大瀧口

熊野口とも呼ばれ、高野山の南東の入口です。熊野本宮から小辺路を経て大滝、そしてここから高野山内に至ります。

▼相浦口

高野山南方の入口で、南谷へ入ってきます。相ノ浦郷から山内への入口です。

▼龍神口

湯川口・保田口・簗瀬口とも呼ばれ、高野山への南西からの入口です。田辺市龍神からの道と有田川町清水からの道が合流してここに至ります。

高野参詣道

●町石道 世界遺産

町石道は九度山町慈尊院から矢立(花坂)、大門を経て高野山奥院へ至る約24㎞の参詣道。高野山への表参道として最も早くからひらかれた道。鎌倉時代に建立された五輪卒塔婆をかたどった町石が1町(約109m)ごとに立ち、古くからの信仰が偲ばれる。平成16年世界遺産に登録された。

●三谷坂 世界遺産

かつらぎ町三谷の丹生酒殿神社から丹生都比売神社に参拝して町石道へ、又は笠松峠から直接町石道へ至る道。久安3～6年(1147～50)に御室御所覚法法親王が用いた記録が残る。沿道には笠石、類切地蔵などの石造物が残る。大正13年(1924)に丹生都比売神社が官幣大社となった際に勅使が通ったことから「勅使坂」とも呼ばれる。平成28年世界遺産に追加登録された。

●麻生津道(西国街道)

紀の川市の麻生津から麻生津峠を越え、かつらぎ町の志賀から高野町の矢立で町石道に合流する。和歌山への往還にはもっぱらこの道が用いられた。

●京大坂道 不動坂：世界遺産

京都・大坂(大阪)・堺方面から河内長野を経て、紀見峠を越え、橋本で紀の川を渡り、学文路から九度山町の河根で丹生川を渡り、高野町の神谷を経て高野山に至る道で、高野参詣道で最も多くの参詣者に用いられたと言われる。堺から高野山女人堂まで1里(約4㎞)ごとに里道標石が建てられ13基の道標石が残されている。現在の極楽橋付近から女人堂までの不動坂は、大正4年(1915)高野山開創1100年に急峻なかつてのルートに代わって新しくひらかれた道が通じるが、近年旧道が復原され平成28年10月世界遺産に追加登録された。

●黒河道 世界遺産

橋本市賢堂から高野山の千手院谷へ通じる高野参詣道で、橋本から高野山への近道とされる。大和国からの参詣客がしばしば利用することから大和口とも呼ばれた。文禄3年(1594)の豊臣秀吉の高野登山の帰途に用いられたことが文献に見え、高野参詣の主要な道の一つであったことがうかがえる。このルートが平成28年世界遺産に追加登録された。

●大峰道

奈良県の大峰山から洞川を経て天狗木峠を越え、桜峠から高野山へ入る道で、大峰山と高野山の二つの霊場を結ぶ道として主に修験者や巡礼者がこの道を利用した。俗にこの道筋を七度半道と呼び、一度この道を用いて高野山へ参詣すれば、その功徳は七度半にあたるといわれた。

●熊野参詣道 小辺路 世界遺産

高野山の南、大瀧口に至る道で、高野山と熊野本宮を繋いで紀伊山地の山々を南北に貫く全長72㎞のルート。高野山からは伯母子峠・三浦峠・果無峠の三つの大きな峠を越えて熊野本宮に至る。道中には石畳や苔むした石仏など、かつての古道の雰囲気が色濃く残っている。

●相浦道

相ノ浦は高野山の南約5㎞にある集落で、『紀伊国名所図会』には織田信長の重臣・佐久間信盛が追放されて住み着いたところと記されている。この相ノ浦から高野山内に入る道で、高野山南谷に至る。

●有田龍神道

有田、龍神から高野山の龍神口(湯川口・保田口・簗瀬口)に至るルートで、龍神から護摩壇山、箕峠を経て北上し、有田川沿いに東進する道と花園の新子で合流し、辻の茶屋、湯川辻を経て高野山の大門に至る。

●女人道 世界遺産

高野山は明治5年(1872)まで女人禁制として女性の立ち入りを禁じていたため、高野山内への入口には女人堂と呼ばれる籠り堂があり、これらを綴るように八葉蓮華の峰々をめぐり、山内を遥拝した道が女人道と言われている。この道は高野山内と山外を画する境界にあたることから結界道とも呼ばれた。平成28年10月世界遺産に追加登録された。

紀伊山地の参詣道ルール

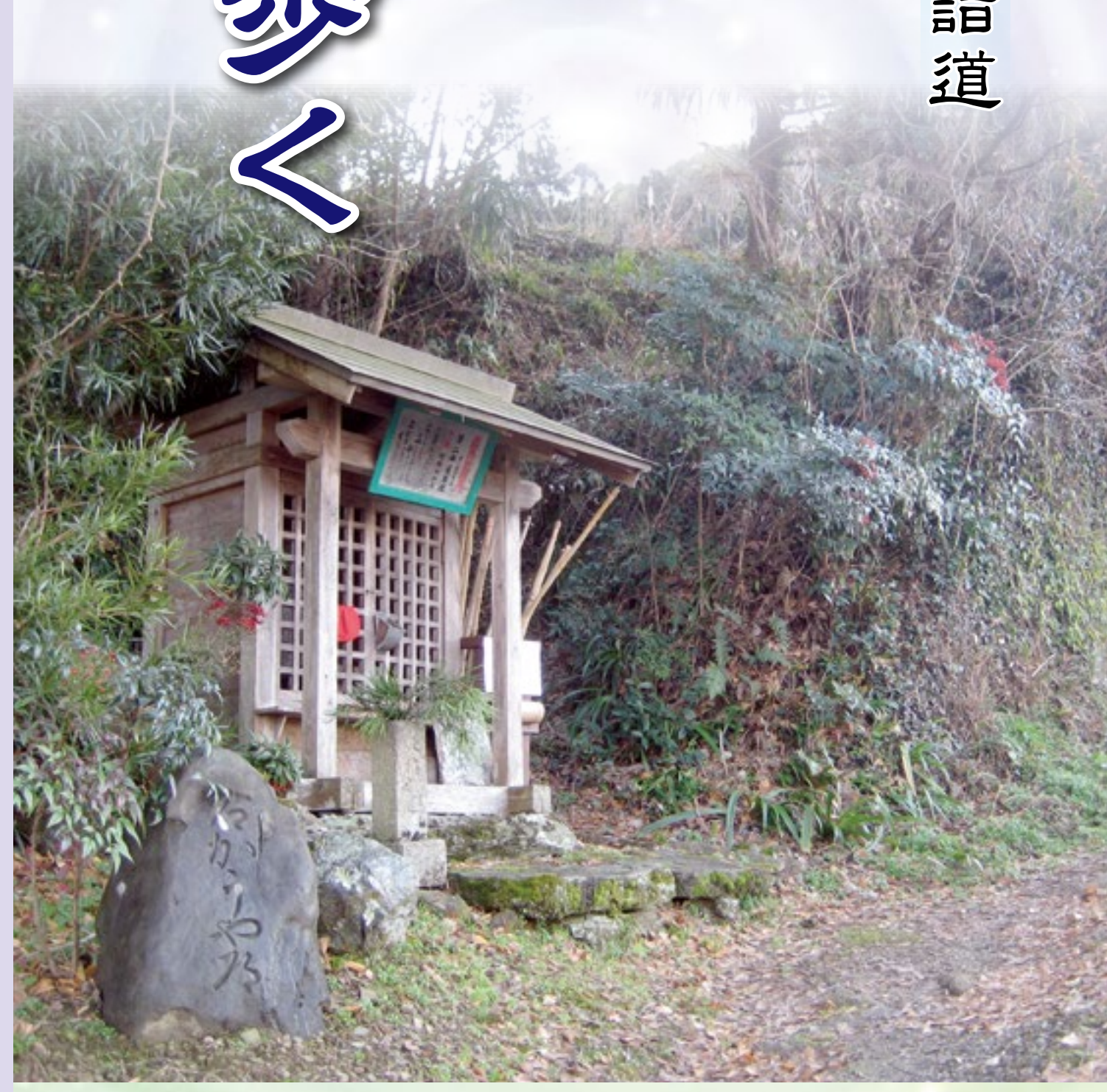
1. 「人類の遺産」をみんなで守ります
2. いにしえからの祈りの心をたどります
3. 笑顔であいさつ、心のふれあいを深めます
4. 動植物をとらず、持ち込まず、大切にします
5. 計画と装備を万全に、ゆとりをもって歩きます
6. 道からはずれないようにします
7. 火の用心をこころがけます
8. ゴミを持ち帰り、きれいな道にします

参詣道を歩かれる方へ

- スパイク付きの靴の使用を控えたり、トレッキングポール(ストック)の先端(石突き)金属部分にはゴムキャップをつけるなど、道の保護に配慮してください
- 車両等の乗り入れをしないでください
- 事前に参詣道の情報を収集してください

世界遺産 紀伊山地の霊場と参詣道

高野参詣道 黒河道 京大坂道を歩く



橋本市賢堂(堂前の道標は平成28年11月に移設されたもの)

橋本市・橋本市教育委員会

高野参詣道 京大坂道沿道 みどころ

㋐三軒茶屋大常夜燈籠



紀の川の渡し口を示す常夜燈籠が2基建つ。紀見峠を越えて橋本に至った高野参詣者は橋本川河口付近から紀の川を渡し船でこの地に降り立つ。西へ進むと京大坂道、南へ進むと黒河道を経て高野山に至る。対岸の東家にも同様の常夜燈籠2基のうち1基が残る。

㋑高野街道六地蔵第一・西行堂



紀の川南岸の高野街道(京大坂道)で、高野山までの途次、六地蔵になぞらえて6か所の地蔵が高野街道六地蔵と呼ばれている。その第一がここで、堂は西行堂とも呼ばれ、風呂敷包を背負った西行像といわれる坐像がある。また、堂の前に桜の古木があったという。昔、光厳法皇が紀の川に落ちて濡れた衣をかけたとされ、その話は『太平記』に見える。

㋒清水井(清水三井のうちの一つ)



弘法大使の加持水とされる「清水井」、「薦池井」、「石井」は清水三井と呼ばれている。
うち清水井は紀伊清水駅の北、河川敷に接して今も水が湧き出ている。
清水の地名はこれに由来するという。

㋓社皇神社・鎌不動





社皇神社は紀の川の対岸、市脇の三部明神(相賀大神社)の姉神を祀ると伝える。かつては祭礼に三部明神から神輿の渡御があったとされる。鎌不動は弘法大師が鎌で作ったという不動尊がまつられている。

㋔戸谷新右衛門の墓



明治の自由民権運動の高まりにより掘り起こされた義民伝承で、石籠詰めの刑で亡くなった新右衛門を村人が密かにここに葬ったとされる。

㋕高野街道六地蔵第二



高野街道六地蔵の第2番目の地蔵。『紀伊続風土記』には「境内周二十二間」とあり、かつては約10m四方の境内地があったが、現在は国道370号交差点の片隅にひっそりと小堂が残る。

㋖高野街道三里道標石・物狂石





幕末に茱萸木村(大阪狭山市)の小左衛門と五兵衛が発願して高野山女人堂から堺の大小路橋まで1里(約4㎞)毎に建てられ、それぞれに高野山女人堂への里程が刻まれている。和歌山県下では橋本市柱本の紀見峠の6里石から、橋谷、東家、学文路、九度山町河根、高野町の神谷に今も道標が残る。街道南側の物狂石は「大師様の腰掛岩」とも言われ、弘法大師がここに住む高師四郎の善行を愛し、経文を誦読したと伝える。

㋗興山寺領御国領境界標石



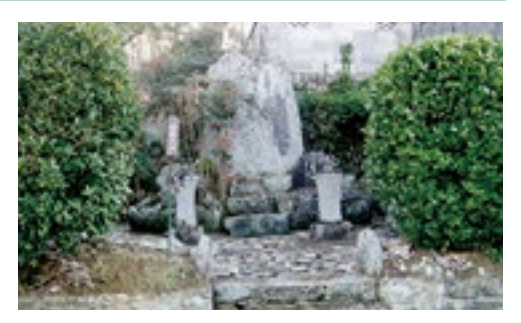
興山寺領と御国領の境界を示すもので、かつては東方大谷川に架かる土居橋付近にあったとされ、現在はここ学文路郵便局前に移設されている。興山寺領は高野山領、御国領は紀伊藩領のこと。

㋘学文路三叉路道標石



宝暦8年(1758)に建立された道標で、慈尊院(九度山町)へ1里(約4km)、高野山女人堂へ3里(約12km)と記す。高野山へ向かう道と慈尊院へ向う道の分岐点。

㋙杖の梅



「杖の梅天神」とも呼ばれる。空海が讃岐(香川県)から杖として突いてきた梅の木をこの地に差し置いたのが芽吹いたものと伝えられ、梅の縁により小さな社を設け、天神を祀ったと伝える。

㋚学文路苅萱堂



学文路の地は石童丸物語の舞台となったところで、ここでこの物語を高野参詣の人々に絵解きなど唱導を行った。この物語ゆかりの品々や版木が多数伝えられ、石童丸の母の千里の墓とされる墓石も残されている。

㋛しづく石



学文路駅から南方へ約500m、県道となっている高野街道の東側に水の滴る大きな岩が露出している。硯を作る石材として用いたという。

㋜幡天神社



廣畑大神と称される石清水八幡の和神霊をお祀りしていると伝えられ、「廣」が省略され、また、大神が天津神となって天神と称されるに至り、幡天神と呼ばれるようになったという。

㋝高野街道六地蔵第三



高野街道の3番目の地蔵。九度山町の繁野の集落にあり、今も街道の東側に残され地域の人たちに信仰され続けている。

㋞弘法清水



弘法大師がこの地を通りかかった際、村人に硯の水を求めたところ、あいにく水はなく、村人は遠い谷まで行って水を汲んで来た。大師はこの厚意を大変喜び、ここに水が湧き出る井を設けた。それ以来、この井を硯水とも呼ぶようになったと伝える。

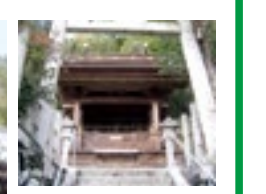
㋟高野街道六地蔵第四



河根峠にある地蔵で、高野街道六地蔵の第4とされる。ここから南へは急な下り坂を経て河根の集落に至る。

㋠丹生神社・日輪寺





丹生神社・日輪寺は河根村の北にあり、江戸時代後期の書物には、高野明神社としてみえる。一間社流造の社殿で、永正14年(1517)に改修されたことが棟札に見える。日輪寺はその別当とされる。

㋡河根・千石橋・高野街道二里道標石



河根は高野街道の宿場として発達し、室町時代には集落を形成していた。江戸時代には高野参詣の旅人の大半はこの地を通るようになり、本陣、旅籠、茶屋などが立ち並び賑わいをみせた。千石橋は河根と作水を分かつ丹生川に架かる橋で、長さ18間、幅2間半、高さ10間余りの欄干を持つ橋で、大橋とも呼ばれる。7年毎に営繕費千石を支給したことからこの名があるという。また、千石橋北詰に高野街道二里道標石が立つ。ここから高野山女人堂まで2里(約8㎞)の距離となる。

㋢作水・高野街道六地蔵第五



作水は西郷の小名。千石橋から南へ急な作水坂を登った小集落で、高野街道六地蔵の第5が街道の東側に立つ。

㋣桜茶屋・高野街道六地蔵第六



急坂の途中にあり、この辺りには桜が多く、その中でも一本の古木がひときわ聳えていたという。道の山手東側には地蔵がまつられ、高野街道六地蔵の第6に数えられている。

㋤神谷の仇討・黒岩・殉難七士の墓





桜茶屋からの急坂を登りつめたところに黒岩と呼ばれる岩が街道沿いにうずくまっている。明治4年(1871)2月30日(一説には29日)ここで仇討が行われた。ここから街道に沿って約400m登ったところに、討たれた7人の墓が残されている。明治6年2月7日に仇討禁止令が出されたので、これが日本最後の仇討となったという。

㋥神谷・高野街道一里石



神谷は西郷村と細川村の出村として成立し、高野街道(不動坂口)の高野山に最も近い宿場として栄えた。幕末から昭和初期までが最盛期で、「日が昇ると銭が湧く」とまで言われた。昭和4年(1929)極楽橋まで電車がつき、翌年ケーブルが開通すると賑わいは失われていった。

㋦極楽橋



南海電車極楽橋駅の傍らにあって、不動橋とも呼ばれ、不動谷川に架かる。ここから24町(約2.6㎞)で女人堂に至る。

㋧不動坂



極楽橋(不動橋)から女人堂までの急坂を不動坂といい、高野七口の一つに数えられる。この坂は高低差が300m以上あり、大正4年(1915)高野山開創1100年にあわせて新しい道が造られたが、近年かつての道が復原され世界遺産となった。

㋨万丈転



谷が深く急な斜面となっているところで、その昔、高野山で罪を犯した者が簀巻にされて、投げ込まれたところと伝える。

㋩稚児の滝



高野山吉祥院の稚児がこの滝壺に身を投げたことからこの名がある。近松門左衛門の「心中万年草」のモデルとなった話として知られる。

㋪清不動



不動坂や不動谷川の名はこの不動に由来する。高野参詣前の心身を清め直す場であった。

㋫花折



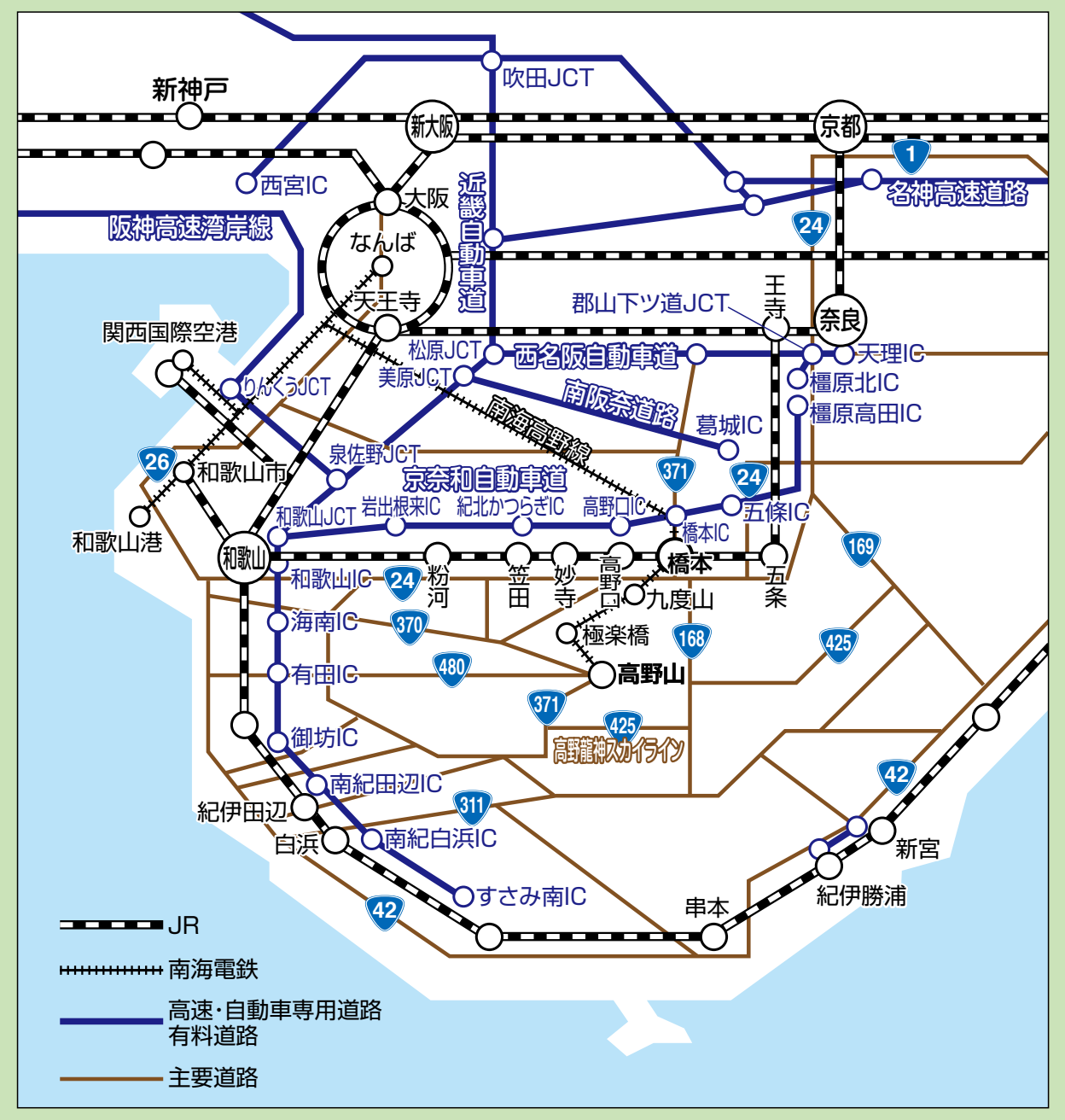
女人堂を目前にして、高野参詣の旅人たちはここで花を折り、奥の院へお供えしたという。

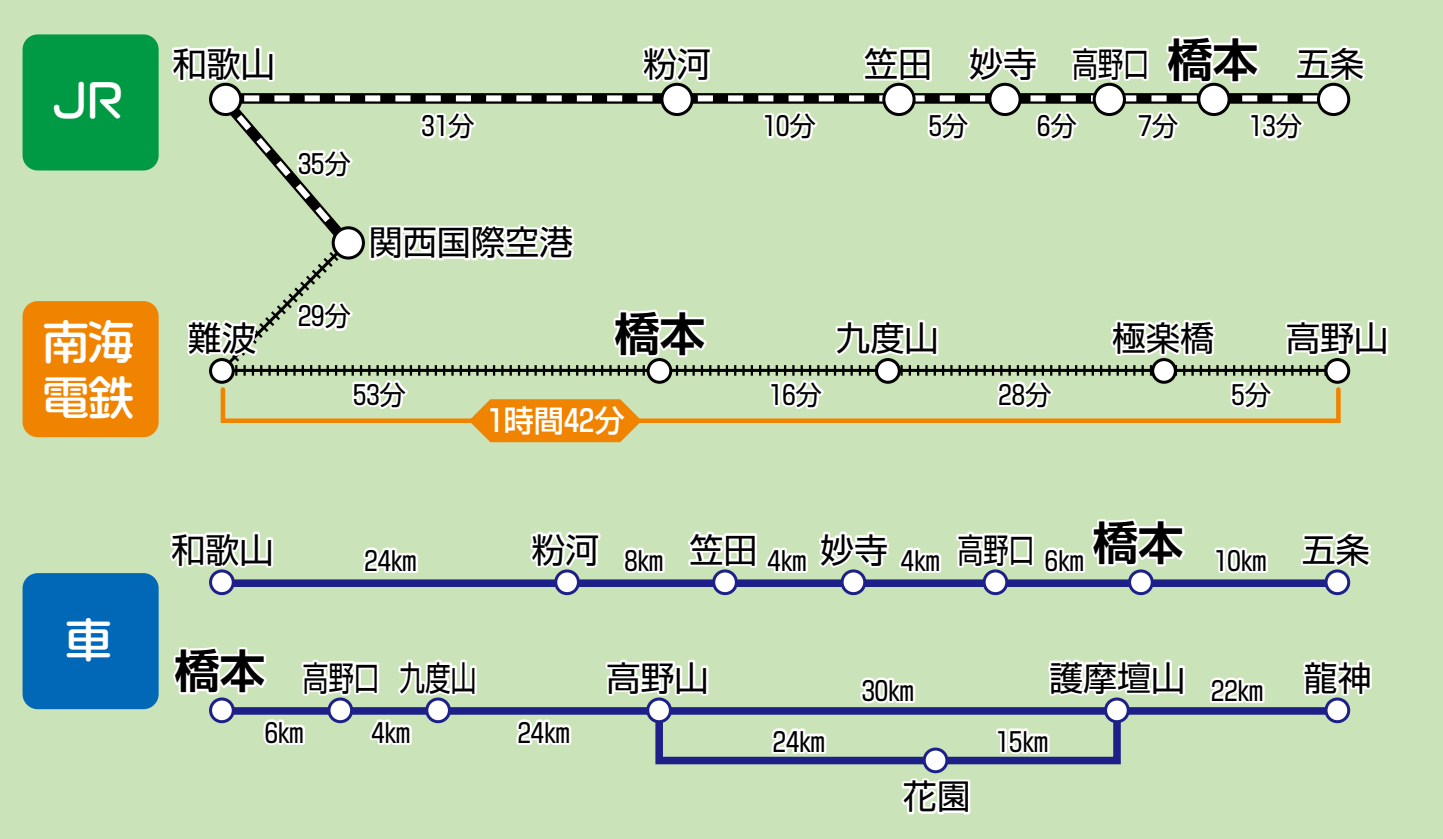
㋬女人堂



かつては高野七口にそれぞれ女人堂があったが、今ではこの不動坂口にのみ女人堂が残されている。高野山は女人禁制であったため、女性はここから先の山内に入ることはできなかった。そのため、女性のお籠り堂として女人堂が建てられ、女人堂を縫うようにして女人道を巡り、山内を拝した。

交通アクセス





お問い合わせ

橋本市教育委員会生涯学習課
TEL.0736-33-3704

橋本市経済推進部シティプロモーション課
TEL.0736-33-6106

はしもと広域観光案内所
TEL.0736-33-3552

2025.3 中和印刷紙器㈱ 印刷(改訂)